

「人としての生き方、在り方の根っこを培う」
～ 道徳科（道徳教育）が目指す資質と大人との関り ～

千里金蘭大学 黒瀬 哲也

道徳が教科化になり小学校では平成 30 年度から、中学校では平成 31 年度から「特別の教科・道徳」が始まる。道徳科のルーツは、昭和 33 年度の学習指導要領で特設された「道徳の時間」までさかのぼる。

およそ 60 年の歳月が流れたことになり、翌年の昭和 34 年春には、皇太子ご成婚や東京オリンピックの開催が決まるなど、当時の国民的イベントを振り返るとまさに隔世の感がある。

特設された当初より道徳教育のねらいは、週 1 時間の「道徳の時間」だけで達成できるものではなく、各教科、特別活動など学校の教育活動に加えて家庭、地域の力に負うところが大きい。

文部科学省の新しい学習指導要領解説（2017）には、「家庭や地域社会との連携による指導」の項目が設けられ、児童生徒が「地域社会の一員としての自覚」をもつとの目標も明記されている。

このようなトピックを背景に、千里山竹園児童センターの人権研修会では、11 月 19 日に「人としての生き方、在り方の根っこを培う」～道徳科（道徳教育）が目指す資質と大人との関り～をテーマに講話をさせていただいた。子どもの道徳性（豊かな心）の育成には、大人たちの支えが不可欠であり、本論稿はそのための「子ども理解」や「教育で大切にしたいこと」を中心に話した内容などを記録としてとどめ、筆を加えて少し補足したものである。

1. 大人はだれもはじめは子どもだった

「大人はだれもはじめは子どもだった」は、星の王子さま（サン＝テグジュペリ、1943 年）に出てくる有名な言葉である。遠い昔におい

てきた、子どもだった頃の気持ちを目の前の子どもの姿に重ねてみる時、子育て・教育で大切にしたいことが見えてくる。

私は片山小学校と南山田小学校の校長として 5 年 3 カ月の間、朝、正門で子どもたちを出迎えた。入学後間もない 4 月、1 年生が聞いてくる言葉がある。新しいランドセルを背負い、坂を上って学校の正門にたどり着き、校長先生を見つけてたずねる言葉とは、「今何時？」。私が答える、「8 時 6 分かな」。するとまた聞く、「ぼく、おくれてない？」。

1 年生の姿に、学校教育の原点を見る思いがする。口に出してたずねる子もいれば、「おはようございます！」と元気に駆けぬける子もいるが、どの子どもの姿にも「学びたい、知りたい」との思いがつまっているような気がしてならない。

教育には二つのモデルがあるという。一つは相互の積極的意志が前提となる「師弟モデルとしての教育」であり、もう一方は「社会モデルとしての教育」である。近代学校制度は、教育を受ける側の意志や同意を前提としないだけに「社会モデルとしての教育」とされているが、子どもの姿からは、学びたいという子どもの気持ちと育てたい、教えたいとの教師の思いが一つになって成立する、「師弟モデルとしての教育」の側面を強く感じる。この気持ちを 9 年間大切に育てたい。

朝、正門に立って挨拶をしていると、様々な経験をする。小春日和の朝もあれば、冷たい横殴りの雨や風が吹く朝もある。

「おはようございまーす！」大雨の日は、大声で呼び合わないと聞こえない。返ってくるのも「おはようございまーす！」ではあるけれど、ただそれだけではすまない何かを互いに感じる。6 年生の子が、挨拶のボールを投げてくる。「校長先生『も』ガンバンナ！」

「あっ、『は』やないんやな、『も』やねんな。」と私は思う。起きたら大雨の朝、濡れながら学校までやって来た…。正門で先生の姿を見つけると、何か連帯感のようなものが生まれるからかもしれないが、ここでも言葉に出すかどうかは別にして、「大人の背中を見せる。」という意味を理屈抜きに感じた瞬間である。

教育は、コップをはじくのに似ている。小さくはじけば小さく返る。

大きくはじけば大きく返ってくる。子どもはとくに正直だ。

道徳の時間では、週 1 時間の授業を通して子どもたちが培ってきた道徳的な心情や実践的意欲と態度などの道徳性を計画的、発展的な指導によって補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的实践力を育成することが目標として掲げられている。補充、深化、統合するものは、本や映像から得た知識だけでなく、学校はもとより家庭や地域社会等で出会い、仲間や大人たちと交流するなかで得た豊かな体験が基礎になる。生活の基盤があってはじめて、学習指導要領が今回言葉をあらためた「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習。」も「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とのねらいも達成されることになる。

2. 向上目標と達成目標（到達目標）

研修会では、私が吹田第六小学校で担任していた時に、子どもが書いた作文を紹介した。「臨海学習、私の決意」という臨海学習を前にして学校のプールで何度も練習をした日々を描いた 6 年生の作品である。作文には子どもと関わる時に大事にしたいことがたくさん出てくる。作文は、『だいぶよくなったぞ。』、『ちゃんとできてるぞ。』、何回目かの隊列指導の時の、先生の言葉で私はとっても自信がついた。」という先生との対話ではじまる。

「だいぶよくなったぞ。」、「ちゃんとできてるぞ。」算数の九九の計算や漢字の書き取りと違い、力を抜いて伸びやかに、疲れないフォームで泳げるようになったかどうかは自分ではよく分からない。臨海学習に向けた平泳ぎの練習は、何メートル泳いだという到達目標（達成目標）的な側面だけでなく、「手足を交互に、スムーズに動かして…」など自分ではなかなか気づけない向上目標的な側面が強い。向上目標は、評価者（先生などの大人）が返さないと相手（子ども）には伝わ

らないことをこの作文は示している。

また目標に向かって活動するとき、子どもは無意識の内に予測を立てる。立てたら必ず確かめる。作文では、先生に褒められた自分の姿を見つめ直して、自信を取り戻す様子が綴られている。B 班の一員に加わって海で皆と泳ぎきるという「自分が演じたい役柄」に向かって、演じることが出来る自分になるように努力する「わたし」が、少しずつあられる。

それまで抱いていたプール学習への苦手意識や劣等感が消えていく。「何で、こんなにあかんのやろ。」と自己肯定感が持てなかったのは、「やっぱり、思うようにはならへんわ」が続くから。うっとおしいことの積み重ねは、落葉が溝をふさいでいくように子どもの心をふさぐ。自己肯定への流れがスムーズに行くように、溝をふさいでいるものを取り除くのが大人の役目ではないだろうか。

「おまえはどうせだめなんや」で発憤する子どもは少ない。けなされっぱなしの人生は、けなされずにはすまないような事を、せずにはおれない人間をつくる。「やっぱり、言うとおりにしかならへんわ」と思わせたら、折角のダイヤの原石もただの石で終わってしまう。

「臨海学習、私の決意」の最後は下記のような自信と希望に満ちた、弾んだ言葉で結ばれている。

「23 日から出発する臨海学習、この調子でうんとがんばるぞ！

B 班の遠泳の本番が終わったら、ぜったいげんこつを出して、

『やったあ！』とさけぼう。」

彼女の中には、皆と一緒に広い海を泳ぎ切った自分がイメージされている。自分が演じたい役柄と演じることが出来る役柄、そして先生から期待される役柄までもが一致した時、その姿を子どもたちは本当の自分の姿だと考える。

子どもには、「本当の自分」を感じる瞬間を出来るだけ多く味わって欲しい。無論そのためには、演出家としての大人たちの役割が無くてはならない。

3. 昨日の自分をこえる今日、今日の自分をこえる明日

“昨日の自分をこえる今日、今日の自分をこえる明日” 全校朝礼で子どもたちに、こんな話をしたことがある。

「先生は、みなさんの教室に行って、勉強の様子を見て、一つ気づいたことがある。今日は、その話をします。それは、ノートを丁寧に書いている人が多いということです。字も丁寧だ、物差しを使って、大事なところは色鉛筆や赤ペンで線を引いたり囲ったり。これはいいなと思う。それをずっと続けてる。ここが良い。それだけじゃない。しばらく経ってから、次また教室に行くと、ノートがもっと良くなっている。ていねいに書く人も増えている。ページも増えているし、もう 2 冊目という人もいる。こういう人は、別に人と競争してるわけじゃない。毎日、自分で自分のノートを大事に使い続けている。そんな一生懸命な姿をみて、先生はこんな言葉を思い浮かべた。『昨日の自分をこえる今日。今日の自分をこえる明日。』ノートだけじゃない、何かをずっと続けている人は、ここにもたくさんいると思います。自分の力を高くするには、昨日の自分をこえるには、何事も『続ける』これが一番大事です。

先生は、授業中、一生懸命、丁寧なノート作りに取り組む姿を見て、ダイヤモンドの輝きを思い出しました。ダイヤモンドは始めから、綺麗に輝いているわけではありません。ダイヤモンドが輝くのは、自分を削って、磨き続けた時です。ほかの石と比べても、自分の輝きは変わりません。自分に磨きをかけることで、昨日の自分をこえる今日、今日の自分をこえる明日が来ると思います。」

「愚痴の親より、感嘆の親」という言葉があるが、学校でも家庭でも、ついつい悪いところが目について、小言が過ぎた経験を持つ大人は多い。しかしほめて育てることの大切さは言うまでもなく、日常生活の一寸した場面で子どもたちの努力や良さを認め、必ず口に出して伝えたい（評価したい）ものだ。

勉強でもスポーツでも家の仕事でも、何かをずっと続けている子どもは大勢いる。別に人と競っているわけではない。懸命に取り組む子どもたちの姿を見ていると、決して大袈裟ではなく「磨かれて輝きを増すダイヤの原石」を思い浮かべる。これまで知らなかったことを知り、できなかったことが出来る時。きっとダイヤモンドのように輝きはじめるその時を想って、子どもたちに話したことである。

まだ若い 20 代の頃、友だち何人かと、それぞれが勤めている学校の、この先輩の話を聞いたらすごいぞと思う先生の名前を出し合い、訪ねて回ったことがある。現在の吹田市佐井寺南が丘辺りに下宿をしていたこともあり、先輩にとっては迷惑だったかもしれないが、ご飯もご馳走になって楽しかったことを覚えている。

I 先生のお宅へ数人でうかがった時のこと、その先生が私に聞いた、「ちゃんと評価してるか？ 子どもを。」の一言は、自分の教員生活の原点につながるエピソードとして、今でも印象に残っている。

夏休みの事でもあったので、「評価していますよ。通知票！こないだも音楽専科の先生から『あゆみ』の最後に一人ひとり丁寧なコメントを書いて、すごいですねと感想を貰いましたよと胸をはると、それは違うと一蹴されてしまった。「違う！ 1 時間の授業の中で子どもたちを何回、何人評価してるて、聞いたんや。」これは衝撃的な一言だった。何人の子どもの言葉を交わし、良さや少しの進歩でも気づいて言葉を返すことができただろう？ しかも 45 分という時間の中で…。

プールや朝礼でのエピソードにも通じるが、子どもを認める（評価する）、共感的に理解する、これほど大切なことはない。「教育の原点は子どもを理解すること」だと言われる所以である。

「一人の人間として人生を他者とともにより良く生きる人格を形成する。」（文部科学省 2017、1 頁）には、まず大人が目の前の子どもたちの良さを認めることではないだろうか。誰もが「分かりきったこと」と思うかもしれないが、意外にも実行していない自分を見出すことがある。

評価には、「今日は、水の中で一度も立たずに頑張れた」の様な自己評価もあれば、教師が授業を振り返る形成的評価などもある。奥の深い話ではあるが、子どもたちと関わる機会のある大人にとって大切にしたいテーマであることはだけは違いない。

4. 子どもの集団作りについて

教育で大切にしたいことに子どもたちの集団づくり、仲間づくりがあげられる。児童センターの日々の取り組みや地域行事の中でも実践されていることだが、最後に「やっぱり学校っていいなあ。」と感じてしまう学校行事の作文を紹介してまとめにしたい。教育で大切にしたいことについて子どもたちから教えられることは多い。

集団づくりの取り組みには、学級活動をはじめ様々な事例があるが、学校や児童センター、地域の行事を通して、子どもたちは発達段階に応じた多様な力や子ども同士のつながりを得る。また、社会の一員としての自覚や友だちと一緒に活動する魅力、意味についてさえ子どもなりに感じ取りながら成長する。

完全学校週 5 日制が実施されたのは平成 14 年のことであるが、当時は土曜日が休みとなることで授業時間数の確保が課題となって、学校行事が精選されてきた経過がある。しかし学校行事の精選は一方で、集団づくりの機会を減らすことにもつながり、新たに生起する問題も多かった。

片山小学校の時、授業時間数の確保などの理由で、一度無くなった校内音楽会を教職員と PTA の皆さんで協力して一緒に工夫し、復活させたことがある。平成 17 年のことである。「このままでは、素うどんのような学校になる。」「子どもたちがわきあがり、親たちが学校に集まって、子どもたちの成長を見ることが出来る機会を増やして欲しい。」という保護者の願いを受け止めてスタートした企画であった。当時は、児童数が 1,000 名を超える過大校であっただけに、PTA の皆さんも、

いろいろな参観のルールを決め（私語はしない、携帯で子どもをカシヤカシ撮らないなど）努力されていたことを思い出す。

努力や工夫の甲斐があり、片山小学校の校内音楽会は大成功であった。子どもたちは、どんな思いでその日を過ごし、本番を迎えたか、当時の２年生と６年生の子どもの作文を紹介する。

「スイミーのハーモニカの最後のレとドがふけなかったのに、今日はできたからうれしかった。それで、ほかの学年もすごかったけど、６年生が一番すごかった。早く高学年になりたいな。」（２年生）
早く高学年になりたいなど、そう簡単に言わせられるものではない。

「音楽会でまっている時、『ハレルヤ』とおなじぐらいきんちょうしました。もっきんの時、ソをひくのにラをひこうとしました。ソとラはとなりどうしだから、よこにうごかしたらソをひけました。歌の時はとっても楽しかったです。おかあさんは、『じょうずだったよ。』と言ってくれました。」（２年生）
親の一言は、子どもにとって何にも代え難いものであっただろう。

「たくさんの楽器が私を元気づけてくれました。」（６年生）

「演奏が終わった後、たくさんのお客さんが大きな拍手をくれたので、その時は、すごくうれしかったです。緊張もしたけれど、すごくうれしかったです。」（６年生）

「小さい子たちも上手に出来ていた。すごくきれいな音だった。来年もみんなと合唱したかった。また今度やりたい。」（６年生）

「みんなと一緒に力をあわせることが、うれしくてしかたがなかった。リズムが体にのってきて楽しかった。」（６年生）

「終わってみると、とてもすがすがしい感じがしました。もう、ぼくたちは出来ないけど、また音楽会がしたいなと思いました。」

(6年生)

「私はすごくうれしかったです。それはなぜかと言うと、すきとおって、まっすぐに音が抜けていくかのように、クラベスの音が、いつも以上に体育館に響いたからです。」(6年生)

クラベスは、友だちと二人で音を合わせる。二人で息を合わせて演奏をすると一人の時の何倍も音が大きく聞こえ、それに心底感動したことを M 君は何度も書いている。得たものが大きかったことが、子どもたちの声から感じられる。

注:クラベス(2本の棒状の木片を打ち合わせることで音を出す打楽器)

5. おわりに

平成26年3月まで在職した吹田市立南山田小学校は、児童数が1,340名をこえる、全国でも屈指の過大校であった。多くの子どもや保護者の皆さん、教職員が共通理解を図り、取り組みの指針となる学校教育目標を「心を磨き、志を育む」と策定したが、この目標は、保護者や地域の方々の協力なくしては達成できない。学校と同様に、各家庭や地域はまさに子どもの心を育てる場である。

人としての生き方、在り方の根っこを培う大切な時期の子どもたちにとって、人生の大先輩である大人が与える影響は大きい。豊かな心を育むためにも、子どもたちとの関りの大切さを皆様と共感して結びとしたい。

(参考文献)

サン＝テグジュペリ 内藤濯 訳 2000『星の王さま』岩波書店

文部科学省 2017 『小学校学習指導要領解説・特別の教科道徳編』